
秋雨

氷村 瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋雨

【Nコード】

N0186B

【作者名】

氷村 瑛

【あらすじ】

男一人称、雨の日に喧嘩したカップル。場面は教室っぽい場所を想像しましたが得に指定は無いです

窓に打ち付ける雨粒が奏でる止まない雑音。

それが今は耳障りではなく、僕の心を撫でるようで。

背中を向けてる君が居る。僕が傍に居るっていうのに外ばかり見てる。雨に嫉妬、なんて馬鹿らしい。くだらない。

声をかけたって振り向いてなんかくれないし。僕の存在を認めていないみたいだ。

雨は止まない。ただそれは無常にも僕の心を濡らし、全て流していく。綺麗な気持ちも、汚い感情も。

僕に向けられていた君の眼は何時だって温かかったのに、今は冷たい雨をじっと見つめるだけで。

…冷たいのは君じゃなく雨でもない。他でもない僕なのだ。

後ろからそつと彼女の髪に触れ、指を通し、その絹糸のような肌触りを愛おしく思う。抱きしめて鼻を寄せれば 女の子の匂いというのか、シャンプーの清潔な香りが漂って。

「じゅめん」

彼女の頬が流れるものが、まるで温かい雨のようで。

そういえば君は雨が嫌いと言っていた。理由は何だったか、確か太陽が見えないからとか子供みたいな理由だった。その時僕は言ったんだ。

雨はいつか止むんだよ、と。

冷たいだけの雨は無いんだよ、と。

今更思い出してしまった自分が馬鹿みたいだ。

君の細い声が響く。

「…雨は止むの」

僕は頷いた。何度も頷いた。愛おしくて愛おしくて堪らなくて、強く強く抱き締めた。

君の眼から流れる雨が止み、またいつものように明るく晴れる事を願って。

窓の外はいつのまにか静寂になっていて、雨音のノイズは消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0186b/>

秋雨

2010年12月9日05時27分発行